

歴史

おさらぎ橋の名の由来

南から福島市内に入る国道四号線筋に「大仏橋」(おさらぎばし)という橋がある。阿武隈川と共に市民には馴染み深い橋である。「おさらぎ」は苗字として、「赤穂浪士」や「帰郷」「宗方姉妹」などを次々と世に出し文化勲章を受賞した作家、「大仏次郎」という人が居る。しかし、この名前はペンネームで、本名は野尻清彦という。

そこで、「大仏」を「おさらぎ」と読む疑問を追って、福島県内はもちろんのこと、この姓を探してみた。すると、全国に五十五人がこの「おさらぎ」を苗字として名乗っていることが解った。「大仏」をなぜ「おさらぎ」と読むのか、人数が解ったからといって謎が解けた訳ではなく、不思議は深まるばかりであった。「おさらぎ」という読みは国語辞典・広辞苑の見出しにすら登場しないのである。

そこで、福島市の大仏橋にこだわって、福島城の歴史を繙いてみた。すると応永二十年(一四一三)伊達家十一代当主持宗の時、五、六百騎で大仏城だいぶつじょうに楯籠り鎌倉方の関東公方足利持氏と対峙し、攻防数ヵ月で大仏城は落城したという記録があった。ものの本によるとこの中に「百貫交、信夫かわしだいぶつかたと云々・・・」とあるので読

みは「だいぶつじょう」であつたようである。また、他の記録に当時の城は伽藍造りで、坐像か立像かははっきりしないものの丈六四・八米の大日如来が安置されていたとある。その本丸跡が現在の福島県庁舎の地にあつたことも研究者によって明らかにされている。そうすると、大仏橋の位置関係からみて、いまある大仏橋は、その如来像に由来するものであることは、想像に難くない。だが、依然として大仏を「お・さ・ら・ぎ」と読んだことは解明されない。

大仏様は奈良の東大寺、さらには、鎌倉にもおわします。加うるに、福島の政治史は、凡そ鎌倉時代から始まっている。文学史としては、万葉集のあづま歌や近年木簡が出土して話題になった安積采女の「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思わなくに」や能因法師の歌が残っているが、古くは「信夫の郡」は中央集権の下で草刈場のようなところであつたのかも知れない。だが、天平宝字の万葉集歌の盛んなころ、平安初期元○○頃に残されたと思われる

しのぶもじずり

「伊勢物語」に「みちのくの忍振摺誰ゆゑに乱れ染めにし我ならなくに」という葛城王の和歌が残っていることを考えると当時すでに信夫の郡はそれなりの文化を持っていたと推測できる。なお、伊勢物語は多くの人の手が加わり、現在の御物本は藤原定家が清書した

ぎよぶつぼん

ものとするのが定説になっている。

話は横道にそれたが、それにしても、「だいぶつ」から「おさらぎ」へ音韻変化の説明は無理といえよう。しかし、地方史の研究家たちによって次のようなことが解ってきた。

鎌倉時代、執権北条時政の子、時房は鎌倉大仏ときふさの近くに住んでいた。時房は信心深い人だったので、家の傍らには、釈尊が瞑想し、悟りに入ったといわれる沙羅双樹さらしゆが植えられていた。北条時房は文武にすぐれ人望も高かったので、人々は直接この人の名を呼ぶことをはばかり、沙羅の木に「お」を冠して「おさらぎ殿」呼んでいたというのである。それが代々伝わり、そのうち誰云うともなく「大仏殿」と書いて「おさらぎ殿」と尊呼するようになり、定着したというのである。そして、時房の時代から四代さだなおの貞直の時、歌にも残る新田義貞の鎌倉攻めに合い貞直は稲村ヶ崎で討ち死にし、大仏氏一族は滅んだということであった。それでも、人々は北条家の徳望を慕って「大仏」を「おさらぎ」と呼称することで、後世の名残りとしたというのである。信夫の郡の大仏は、信仰深い四代にわたる恩顧に報いるために、今の世まで「おさらぎばし」の尊称を残したのかも知れない。しかし、疑問はさらに残る。現在使われている五

十五家の「おさらぎ」氏の姓である。栄枯盛衰は目まぐるしく変化する。その瞬きのような短い栄光を求めて人々の悲喜劇は展開する。

大河テレビドラマは「平清盛」を流している。結末は古典「平家物語」、吉川文学の「新平家物語」で知っていてもつい観てしまう。

歴史は変えようがないのであるが、脚本家の解釈の仕方や役者のキャラクターが出来不出来を決定するからである。「古典平家」を読めば人生の無常と清盛の横暴さ、「東鑑」を読めば頼朝は冷静沈着、義経は無頼の暴れ者と印象づけられる。これらに検閲があつたとは思えないが、記録書として残すからには、書き手に配慮が働いたことは否めない。

勝者の記録に曝しゃれを残すことは許されないからである。現代におさらぎ姓を繫いだ方々は権力や利権から離れ、今でも沙羅双樹を仰ぎながら淡々と暮らしていると信じたい。「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」という諺がある一方、「出る杭は打たれるが出すぎた杭は打たれないという人もいる。だが、出すぎた杭は切られることがあることも忘れてはならない。生きるということの名人は賞罰なし、功績も失態もない、このような人びとを言うのかも知れないとふと考えさせられる「おさらぎ橋」ではある。